

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 4日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21500593

研究課題名（和文）マスターズスポーツ振興事業による社会的便益の効果分析とアクションリサーチ

研究課題名（英文）The Impact Analysis and Action Research on Social Benefits of Masters Sport Promotion Projects

研究代表者 長ヶ原 誠（CHOGAHARA MAKOTO）

神戸大学大学院・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：00227349

研究成果の概要（和文）：

国内外のマスターズスポーツ振興事業に関する調査の結果、マスターズスポーツ大会の開催や熟年者を対象としたスポーツ推進キャンペーン事業が、開催地への社会経済的效果だけでなく、その結果、マスターズイベントの開催や参加者のスポーツ活動がもたらす身体的健康、心理的健康、教育、コミュニティ、社会文化面での便益に代表される個人的・社会的便益の側面が明らかとなった。またマスターズスポーツ大会の開催によるアクションリサーチを通じたインパクト評価とアウトカム評価の結果、仮説として掲げていた、個人のライフスタイル活性化、地域の活性化、社会活性化、次世代教育の活性化が認識され、生涯スポーツを振興させる有効な事業であることが実証された。

研究成果の概要（英文）：

The survey on masters sport promotion projects in Japan and foreign countries shows that hosting the masters sport events and sports promotion campaign targeting the matured-aged population have given not only the economic benefits but also the personal and social benefits concerning physical health, mental health, education, community, and social culture the event host cite. The action research of holding masters event was conducted, and the findings of the impact and outcome evaluation indicated that hypothesized benefits of activation/vitalization of individuals' lifestyle, community, society, and education for the next-generation were confirmed. It can be concluded that masters sport promotion is an effective method for promoting lifelong sports.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4030,000

研究分野：複合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：マスターズスポーツ、スポーツイベント、アクションリサーチ

1. 研究開始当初の背景

人口の高齢化と中高齢期における人々の意識とライフスタイルの多様化と共に、中高齢者におけるスポーツ参加に対する志向とニーズも拡がりを見せており、かつて経験した「目標や記録に挑む」、「技を磨く」、「技を競う」、「緊張感や達成感を味わう」等を志向するスポーツの楽しみ方を、中高齢期において再始動させたり、さらなる成熟化やレベルアップを目指そうとする熟年スポーツ愛好者が増加している。その受け皿となるマスターズスポーツイベントが各地で開催され、現在、国内外で約470のスポーツ種目に及ぶ世界、複数国、全国、地域レベルの各種大会が開催されており、推進母体となる組織・団体の設立や、普及啓発のためのキャンペーン事業が精力的に展開されている（神戸大学マスターズスポーツ振興支援室：マスターズスポーツイベントに関する国際調査、2007）。このようなマスターズスポーツの世界的な普及・振興への兆しが見られる中、一方では、特異性や排他性等の従来からの先行イメージが影響し、社会的意義や便益への理解不足から、社会的な認識や支援を得にくい実情が多く関係者から報告されている。学術面においても、マスターズスポーツ参加者を対象とした生理学的研究やトレーニング論、参加者の動機や継続要因分析を中心とした心理学的な研究成果は見られるものの、社会的・文化論的な視点によって、マスターズスポーツが個人や社会にもたらす便益や効果を分析した研究知見は乏しい。さらに、中高齢者を対象とした運動・スポーツ科学に関するこれまでの研究では、老年医学的視点から「運動」の方に対して活動種目の重点が置かれ、研究成果の多くは運動の実施が及ぼす身体・健康的効果に関する情報が多く、様々な「スポーツ」への参加と、その参加による行動的、対人的、教育的、地域的、文化的な各種便益や効果については研究成果に乏しく、前述したマスターズスポーツ振興上の課題の点からも本分野の情報支援が必要となってきた。

2. 研究の目的

本研究では、これまでの国内外におけるマスターズスポーツ振興事例を集約し、それらの事業成果に着目しながら各事業がもたらした社会的便益の内容とそのプロセスを明らかにしていく。これと同時に、より具体的な因果関係を検証し新たな社会的便益を探究するために、筆者らが始動したマスターズスポーツ振興事業のアクションリサーチを展開しながら、事業成果の評価を通じた社会的

便益分析を実施することを目的とした。

3. 研究の方法

<21-22年度>：マスターズスポーツイベントに関する国際調査（2007）で収集した国内外のマスターズスポーツ振興の事例データ（全714ケース）から、マスターズスポーツ振興事業の3要素（機会・組織・情報）であるイベント開発事業、組織活性化事業、キャンペーン事業による社会的便益分析を各ケースで実施した。評価方法は平成15～17年度基盤研究で筆者らが開発したスポーツプロモーション事業評価指標に基づいて、事業投入量→要因変化→行動・組織変化→便益発生シナリオ分析を、各事例の資料データ分析と担当者への質問紙調査によって行った。分析の結果、特に事業成果が高かった事例については、現地での質問紙調査やインタビューによるフォローアップ調査を実施し、マスターズスポーツ振興事業がもたらす社会便益の情報を収集した。

<平成23年度>：マスターズスポーツがもたらす種々の社会的便益の仮説群に基づいて事業化された「マスターズ甲子園プロジェクト」（詳細は計画・方法で記載）を活用し、参加者に対する質問紙による一斉調査、約350箇所の地方組織の運営者からの各種データ、各地のメディア掲載資料やホームページへの掲載データを用いて量的・質的（テキストマイニング手法）方法を用いて仮説検証を行った。前述の国内外の事例分析だけでは発見できない具体的な社会的便益が生まれていくプロセスと因果関係を明らかにした。

4. 研究成果

研究成果は以下の点に集約される。

<マスターズスポーツ大会の開催やキャンペーン事業の調査結果>

マスターズスポーツイベントに関する国際調査で収集した国内外のマスターズスポーツ振興の事例データ（全714ケース）から、マスターズスポーツ振興事業の3要素（機会・組織・情報）であるイベント開発事業、組織活性化事業、キャンペーン事業による社会的便益分析を各ケースで実施した。評価方法は平成15～17年度基盤研究で筆者らが開発したスポーツプロモーション事業評価指標に基づいて、事業投入量→要因変化→行動・組織変化→便益発生シナリオ分析を、各事例の資料データ分析と担当者への質問紙調査によって行った。分析の結果、特に事業成果が高かった事例については、質問紙調査や送付資料分析によるフォローアップ調査を実施し、マスターズスポーツ振興事

業がもたらす社会便益の情報とそれを可能にする振興事業方法に関するガイドライン案を作成した。「単独種目型」のイベント事例分析によるこれらの結果と、平成21年度に実施した複数種目型の事業調査結果を統合した結果、マスターズイベントの開催や参加者のスポーツ活動からもたらせる活動健康・身体的便益、心理・精神的便益、教育・労働的便益、社会経済的便益、社会集团的便益、社会文化的便益に代表される個人的・社会的便益の側面が明らかとなり、さらにこれらの便益の中で総計85項目に及ぶ便益指標が抽出された。これまで中・高齢者のスポーツ活動がもたらす効果分析では主に健康・身体的便益や心理・精神的便益が主流となっていたが、マスターズスポーツに関わるイベント開催、クラブ育成事業、啓発・周知キャンペーンを通じて、より社会的なインパクトをもたらしていることが明らかとなった。

また、各大会でのマネジメント効果を具体的に分析すると、最も関心が向けられているのは、生涯スポーツの祭典という目標達成に対して直接的な成果指標となる大会参加者数の確保である。過去の大会における組織的な取り組みとしては、1) 国のスポーツ組織から世界の該当の競技種目組織への連絡、2) 国際スポーツ連盟の役員や技術代表者へのPR活動、3) 国内外の各スポーツ連盟に対する公式イベントカレンダーへの大会日の掲載、4) 地元でのプレマスターズ大会の開催、等が挙げられる。メディアパートナーとしては、競技者や地域へのイベントの宣伝とスポンサーに付加価値を与えるためのテレビ、ラジオ、紙面での協力が主であり、高齢者がスポーツを行うこれまでの固定観念を逆手に注目を煽る「カウンターメッセージ」と呼ばれる情報戦略が用いられることが多い。また、全世界における主要なスポーツ・文化イベントカレンダーを作成し、各イベントとの協力を得た上で、イベント会場でのパンフレットの配布、ウェブサイトでの紹介、特定の出版物の配布等を通して、国際的な競技者や各スポーツ競技者、スポンサー、ボランティアの各ターゲットに合わせながら効果的なコミュニケーションメッセージが発信されている。戦略的には、費用的に効果的なコミュニケーションのツール、例えば、パンフレットやニュースレター、ウェブサイト、Eメールによるニュースレターなどを主に活用し、まずは第1段階として大会トピック・情報を伝えるために準備始動期に発信し、第2段階では、登録参加選手のトピックに関するニュースリリースが頻繁に行うことによって、熟年者スポーツ参加への意識影響への効果が認められた。また、参加選手の紹介を主軸としたプロモーションキャンペーン

も効果的な手法として一致した見解が得られ、過去の当大会に参加した人々のストーリーをテレビの「バイオグラフィー」でアピールし、同時に、「Never too late (遅すぎることはない)」、「Challenge Never Ends (チャレンジは終わらない)」等のメッセージをすり合わせた、啓発キャンペーンを精力的に行ったことが高く評価されている。このメッセージの到達性に関する効果測定を大会後に実施しており、各大会参加者の約3分の2が、これらのメッセージに対する記憶、関心、注目、という行動を誘発するための心理学的条件に作用し、口コミによるソーシャルサポートやコンパニオンシップ(同伴性)の人的交流も伴って大会参加の動機付けとなったことが明らかとなった。

世界大会レベルでは、世界各国から集まる多くの選手とその同伴者・家族・友人(大会を通して選手数の約1.5倍)が平均して9.5日の期間ホスト国に滞在し、選手・同伴者の観光による経済効果があったと推計されている。多くの国際マスターズイベントが実施されているオーストラリアでケースを集約すると、州に約50億円、州を除くオーストラリア全体に約500億円、州政府に約2億円、所得税収入約5億円の経済効果をもたらし、イベント開催によるスタッフ採用によって1160年に及ぶ州内の雇用創出と、州を除く国内全体で計292年間の雇用を創出したことが推計される。今後、熟年者のスポーツへのニーズの拡大に加え、ツーリズム志向の高まりによって、国際スポーツツーリズム体験を提供するマスターズスポーツイベントの経済効果には益々関心が高まっていくものと思われ、社会経済的効果分析法の益々発展が課題となる。

マスターズスポーツイベントの発展はこのような経済的効果だけではなく、文化的効果も明らかとなった。国内外で開催されているマスターズスポーツ関連イベントを、「国際レベル」、「複数国レベル」、「全国レベル」、「地域レベル」からなる4つの開催規模レベル、さらに、複数の競技種目が1つの大会で行われる「複数種目開催型」および1つの競技種目だけを行う「単種目開催型」からなる2つの大会タイプも合わせてレビューすると、1) 歩行・走力・サイクリング系(例: 散歩、陸上競技、トライアスロン)、2) 体操・ダンス・トレーニング系(例: 体操競技、ウェイトリフティング、トランポリン)、3) 水泳系(例: 水泳、ダイビング、水球)、4) 球技・チームスポーツ系(例: ラグビー、バスケットボール、サッカー)、5) アウトドアスポーツ系(例: オリエンテーリング、クレー射撃、グライダー)、6) ウォーター・マリンスポーツ系(例: レガッタ、ヨット、サーフィン)、7) ウィンター

スポーツ系（例：アルペンスキー、カーリング、フィギアスケート）、8）武道・武術系（例：柔道、フェンシング、レスリング）、9）ゲームスポーツ系（例：ダーツ、スヌーカー、ペタンク）の9分野、計123種目に及ぶ国内外のマスターズスポーツイベントが確認できた。またこれらの中で、高齢者に不相当とされるスポーツ種目開催のイベントでは、観客や大会関係者におけるスポーツサテライトの軽減、大会を支える若年スポーツボランティアの生涯スポーツへの動機づけ効果が一致して見られ、生涯スポーツ教育としての効果を持つことが明らかとなった。

一般的に熟年層を対象としたマスターズスポーツ競技種目の幅はユーススポーツと比較し、狭く限定的に考えられている傾向が強かった。しかし、マスターズスポーツが行われている競技種目の範囲は広く、この各種目のマスターズスポーツ文化の拡がりや浸透が進んでいく中で、エイジングとスポーツに対するこれまでのステレオタイプ（固定観念）が改善され、生涯スポーツ文化全体の発展に繋がっていくことが推察される。

<マスターズスポーツ振興事業のアクションリサーチ>2004年から筆者らが実施してきた「マスターズ甲子園プロジェクト」を活用し、本プロジェクトの3主要事業であるイベント開発、組織活性化、キャンペーンの各効果を明らかにした。本プロジェクトに参加している29都道府県・328校の同窓会組織を対象とした調査分析、ボランティア・地方組織運営者への調査分析、これまで掲載されたメディア情報の内容分析、支援・協力団体に対する反応分析、大会ホームページ情報のメッセージ分析を用いて量的・質的方法を用いて分析を行った結果、アクションリサーチの仮説設定として掲げた本事業がもたらしうる4つの社会的便益：1）個人のライフスタイル活性化（夢への再挑戦による個々の生き甲斐と活力ある人生、等）、2）地域の活性化（地元高校を軸とした同窓会と世代間交流の活性化、地元・母校への帰属意識・愛着心の向上、等）、3）社会の活性化（生涯スポーツ文化、OB/OG文化、熟年文化の発展への寄与、等）、4）教育の活性化（ユース世代へのスポーツ文化の継承と応援メッセージの発信、等）の各カテゴリーの発生が確認された。これらの便益は、これまでのマスターズスポーツの振興事業による便益研究に見られなかった内容が多く含まれ、成人・中高年を対象としたスポーツプロモーションによる新たな効果と今後の可能性を示唆し、組織的なスポーツ種目の文化性や独自性を考慮した生涯スポーツ推進事業の潜在性を提示した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

①長ヶ原 誠「中高年競技者のスポーツキャリア」
体育の科学、61, 678-683, 2011

〔学会発表〕（計2件）

②長ヶ原 誠「運動・スポーツ活動の施策目標を具現化する手順」生涯スポーツ・体力づくり全国会議2012, 秋田, 2012, 2

①長ヶ原 誠「中高年の身体活動と生き甲斐・QOL」
日本体育学会第62回大会医組織委員会企画シンポジウム」2011, 9

〔図書〕（計2件）

①長ヶ原 誠「マスターズ系イベント：ワールドマスターズゲームズのマーケティング戦略」スポーツイベントのマーケティング（間宮聡夫・野川春夫編著）113-124, 2010, 市村出版

②長ヶ原 誠「エイジングと身体活動・熟年期のスポーツプロモーション」社団法人日本ウォーキング協会, 2009

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長ヶ原 誠 (CHOGAHARA MAKOTO)
神戸大学大学院・人間発達環境学研究所・
准教授
研究者番号：00227349

(2) 研究分担者

石澤伸弘 (ISHIZAWA NOBUHIRO)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：60368553